

熱海

沢庵和尚作

季は	地は	シテ	ワキ	後	前
夏	伊豆	医王善逝	前に同じ		
				樵の翁	旅僧

「是は東国行脚の僧にて候。我此程は三島の明神に参籠申し。又是より伊豆權現を拝み申さんため。只今御山へと心ざして候。」

道行「東雲の。空も明くるや箱根山。／＼。伊豆の御崎

は遙々と。雲に連なるわたづみの。そことしもなきながめして。尾越え嶺越え行く程に。松一むらに打ち煙る。磯山里に着きにけり。／＼。

詞「急ぎ候ふ程に。磯山里に着きて候。暫く休らひ里

の名をも尋ねばやと思ひ候。」

シテ「誰こゝに久米のさら山さら／＼に。浮世の品は何事も。耳無山に年を経て。頭の雪や眉の霜。消ゆる命を限りとて。妻木採るにぞ身は苦し。」

下歌「かくて夕陽影うつる。家路の方に急がん。」

上歌「磯波も。帰れと鳴くや時鳥。／＼。折知り顔に音づれて。一村雨の遠近に。振るも音する篠分けて。着馴衣露しげく。朽ちまさりぬる袂かな。／＼。」

ワキ 「如何に是なる老人に尋ね申すべき事の候。

シテ 「こなたの事にて候ふか何事にて候ふぞ。

ワキ 「是は東国行脚の僧にて候ふが。伊豆權現へ参詣申さんために。是まで参りて候。さてこゝをば何くと申し候ふぞ。

シテ 「是は当国熱海と申す処なり。此里に昔より奇特の御座候。凡そ出湯の名所數々なれども。此里には□□□の天地の呼吸に応じ夜昼四度の満干には。

カール 塩の出湯の涌く事熱鉄をわかす鑪鞴の音。又波濤の岸を崩すにひとし。此湯を汲みて家々に。朝夕浴める諸人は。病ふは消えて霜露の如し。

カール 「げにや温泉の流るゝ処冬の草青しと。ましてや今は深緑。草木が上にも此里に。心を添へて見給へとよ。

ワキ 「さてく聞けば不思議やな。その唐帝の古へ。驪

山宮の古事を。

シテ「思へば遠き人の国。

ワキ「我が々の名所や。猪名野を分けて有馬山。

シテ「それは津の国。是は又。

ワキ「難波ならねど蘆刈の湯。

シテ「吠え出づる物か犬飼の御湯。

ワキ「入ればしるしを陸奥や。名取の御湯と聞くは如何

に。

シテ「汲むとも尽きじ七久里の湯。

ワキ「猶もあるらん又いづこ。

シテ「但馬の出湯浴むとて。

ワキ「二見の浦を通りしも。

シテ「明けてはくやし水の江の。

ワキ「翁さびしき。

シテ「里なれど。

地「処は伊豆の国。病ふの熱海たのもしや。衆病悉除
と説き給ふ。仮の国も遠からず。こゝぞさながら

東方の。瑠璃の世界もよそならず。天も影移る。

誓ひの海の底ふかき。潤は尽きじ見給へや。月も

嶺にさし昇る。はや夕汐の出湯かな。く。

「さて面白の浦々や。是に見えたる島山は。如何なる処なるらん。

シテ「見給へ是ぞ世々の人。ながめは経れど見るたびに。珍しければいつまでも。名は新島と申すなり。

地「遙かのよそにほのぐと。流れて遠き島あり。

シテ「あれこそ箱根路を。我越えくれば伊豆の海。沖の小島とながめしを。処の者は引きかへて。大島と申し候ふよ。

地「思ひ合はする島々は。神代の昔神たちの。生み始め給ふ淡路島。

シテ「八島の外も数そひて。おのころ島や百島。

地「千島にあたら花や散る。

シテ「蝦夷には見せじ秋の月。

地 「猶もあたりの浦山。委しく教へ給へや。

シテ 「武士の。八十宇治川にあらねども。篝はそれか氷

魚寄する。網代の港あれぞとよ。

地 「猶入海の奥ゆかし。小舟さし入る苦屋形。

シテ 「身を仇波と打ち捨てゝ。世を伊東が館とはあれなり。

地 「青みて遠き山つゞき。

シテ 「河津俣野が其むかし。

地 「相撲の勝負争ひて。紅葉を顔に散らしゝ。赤沢山の夕づく日。忘れたり方々。御山へ急がせ給ふらん。語ると尽きじ此尉が。繰言もよしなしと。もと來し道に行くと見えて。後影も失せにけりや。うしろかげも失せにけり。 (中入)

地 「實に信あれば徳ありと。 く。 疑ふべきや疑はじ。暫くこゝに祈誓して。神の奇特を待ちて見ん。 く。

「我此名号一経其耳。衆病悉除身心安樂。神といひ
仏といひ。只これ水波の隔てぞかし。

詞
「我此里に跡を垂れて。所を守り民を撫づる。

カ、ル
「もとより東方淨瑠璃世界の主。医王善逝我なり。

我此名号を一度耳にふれん者は。当代無病の人と
なり。身心ともに安樂ならしめんとなり。たゞ頼
め。

(舞)

地
「只たのめ。く。しめぢが原のさしも草。

シテ
「くゆるは者か。衆生の苦患に変はる身の。

地
「胸の猛火に。夜昼四度の塩の出湯。

シテ
「万の悩みに注ぎそゝげば。

地
「病即消滅不老不死。業障も尽き忽ちに。衆罪も
消えて煩惱の雲晴れ。真如の月も。心の空に曇り
なく。夜昼分かぬ光を放ち。夜昼分かぬ光を放つ。
恵日の影ぞ有難き。

底本.. 国立国会図書館デジタルコレクション 『謡曲評积 第六輯』 大和田建樹 著